

編集後記

◇「グーグル和解問題」が空虚な敗北の響きを残し(そして忘れられ)、一時代を画した雑誌が活字メディアから次々に撤退する(そして忘れられる)。他者の言葉に活字を通して出会い、自らの言語表現を活字に載せて発信することに馴染んできた世代にとって、〈活字を刷り込んだ紙を束ねた書物〉という知の形態が急速に色あせていく現在の風景は、たそがれた、うらぶれた風景なのだろうか。このような状況はしかし、もう何年も、いや10年、20年も前から囁かれてきた〈織り込み済みの未来〉ではなかったか。未来を遅延させる執行猶予の時間に、私たちは慣れすぎただけではないのだろうか。このことは人文学という知の領域や、それを支えてきた大学の空間にもそっくりあてはまるはずだ。40年前に叫ばれていたのは〈大学解体〉の呼号だったが、実はそのもっと以前から大学も人文学も〈解体〉に向けてゆるやかな死の時間を生きてきたのではなかったか。もちろん現在の知をめぐる混乱は、出版や大学など知的生産に関わってきた人や組織を、現在の〈解体〉をもって超越的に批判すればよいというような、お気楽な状況ではない。人が自分の死を予測できないように、知のディシプリンも組織も、その危機や死滅を予測することなどできないからだ。問題なのは、まるで狼少年のごとく、大学の危機、人文学の危機、活字文化の危機等々と、〈危機の言説〉をまき散らして、ひたすら歎き続ける人々の声あまりに多く余韻として残ってしまったことである。危機の言説がただ余韻として残ってしまったとい

うことは、〈芸術の政治化〉ならぬ〈知の政治化〉が脆弱であったというよりも、知がいわば〈芸術化〉し〈文学化〉してしまったということを暗示している。知の強度を鍛え直さなければならない。そのことは誰もがわかっている。執行猶予の時間は終わった。そこからアクションは始まる。

◇私たちの雑誌『JunCture』は〈活字を刷り込んだ紙を束ねた書物〉という形にこだわりながら、ウェブ発信の可能性も模索しているし、大学の中の小さな機関を拠点としながら、大学の枠をこえるネットワークの構築を目指している。人文学の領域を守りながら、その領域の一つ一つの部屋と部屋を仕切る壁を外し、窓を開け、外の風を入れたいと考えている。大学という組織の硬直性に対しても、既存の専門学会や学術雑誌の閉塞した細分化のあり方に対しても、私たちははっきりと批判的な立場に立っている。一大学一部局の一機関を拠点として、そのような野心をもって雑誌をつくるなどということは、無謀なことなのかもしれない。しかし、その無謀を、野蛮をあえて選び取ることで、まずは始めたい。

◇「日本文化の脱構築」という特集の表題は、いまや一種アイロニカルな響きを与えるかもしれない。筆者が大学院生の頃、デコンストラクションの言葉はその最盛期を謳歌していた。解体構築あるいは脱構築。日本文化を脱構築するという以上、〈日本文化〉という確たる領域が構築されてあるということがすでに前提として内包されている。そこでの脱構築とは下手をすれば〈上塗り〉にしかなら

ず、「日本文化の脱構築」は「日本文化の保存」を逆説的に意味してしまうかもしれない。私たちの意図はもちろん、そのような脱構築じたいをも脱構築することにある。この特集を組むに当たって、本誌の企画に Editorial Advisor としてご協力いただいている酒井直樹氏、池田忍氏、それに名古屋大学の同僚である日比嘉高氏から、お忙しい中をご寄稿いただいた。また、口絵グラビアの構成に当たってはやはり Editorial Advisor をお願いしている四方幸子氏にお世話になった。このうち巻頭の酒井氏の論考はもともと雑誌 "positions" に英語で発表されたものだが、葛西弘隆氏に短期間で日本語原稿 130 枚に及ぶ翻訳を完成していただいたものである。寄稿者の皆さんと葛西氏に感謝を申し上げたい。

◇『JunCture』の編集委員会を名古屋大学文学研究科附属日本近現代文化研究センターの中に発足させ、Editorial Advisors の方々を委嘱して、投稿規定を設け、投稿募集を開始したのが 2009 年の 7 月初旬だった。お陰様で国内と海外より多数の投稿論文をお送りいただいた。投稿者の皆様と、お名前は記さないが査読委員を引き受けて下さった方々にあらためて御礼を申し上げたい。編集担当者として創刊までこぎつけるのに種々の産みの苦しみを味わったが、それはそれで楽しい苦しみだった。この雑誌がこれから一人でも多くの読者に恵まれ、その名に恥じない日本文化研究の結節点として育っていくことを願っている。あたたかいご支援をお願いする次第である。(T)